
アラベスクの夜に

剣崎薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラベスクの夜に

【Nコード】

N67200

【作者名】

剣崎薫

【あらすじ】

俺の名は『鏡也』。

友達の『小雪』に『裕太』に『友紀』。

この四人で始まるちよつと違う学園ストーリー

靈感が強い『鏡也』

運動神経抜群の『裕太』

勉強なら何かと強い『小雪』

謎だらけの『友紀』

……地味に恋愛が入るかも
そのあとどこから現れる、転校生達
その転校生達は『友紀』の知り合いらしい
しかも転校生の出現で更にややこしくなる学園ストーリー
いったいどうなるのやら

第一話（前書き）

モバゲーからここにやってきました剣崎薫です。

初心者ですので、誤字脱字、漢字間違いがあると思いますが、暖かい目で見守ってください

あと、アドバイスなどがありましたらコメントよろしくお願いします。

第一話

? 「……ふあゝあ」

? 2 「おはよう。ってでつかい欠伸…」

? 「しゃあないだろ、夜遅くまで勉強してたんだから」

? 2 「はあゝ…これだから鏡也は…」

鏡也 「う、うるさい、小雪は終わったのか？」

小雪 「課題でしょ？余裕、余裕」

小雪 「ってか、やってないアンタが悪い！」

鏡也 「はいはい…」

俺の名は『鏡也』（きょうや）。

ある大学に通ってる、？大学生。ただ、唯一違うのが靈感があること…

隣にいてさっきからうるさいのが、『小雪』（こゆき）。俺と同じ大学に通ってる幼なじみ。

小雪も靈感がある。

それでいて成績が優秀。

どんな頭してるのか知りたいぐらいだ。

いつも、俺の課題を手伝ってくれるのは嬉しいんだけど、世話焼きかな…

小雪 「なんか言った？」

…おまけに勘が鋭いし

鏡也 「なゝんも言ってるじゃないよ…」

小雪 「嘘でしょ？」

鏡也 「……」

……女って怖いな…

こういう瞬間ってやだな…。

こういうときに限ってKYなやつが……

？「よっ！また二人で登校か？」

来たよ…

？2「……………」

？「友紀もなにか話せよ……」

ってか友紀も居たのか…

友紀「……………おはよう」

？「あのな…、もう少し喋ろうぜ？」

友紀「……………本を読んてるから無理、裕太」

裕太「だからってな」

鏡也「……………」

小雪「……………」

こ、こいつらにはついていけん…

裕太「お、悪いな、スルーして」

鏡也「…それはいつもだろ？」

裕太「なんだよ、つまんないな」

…俺の何を求めてるんだ

裕太「そりゃ、反応だよ」

鏡也「……………」

小雪「おはよ、友紀」

友紀「……………うん、おはよう」このマシンガントークの男子はこれまた幼なじみの『裕太』（ゆうた）、そして隣でくつついて本を読んでいるのは『友紀』（ゆき）。

なんでこの二人が一緒にいるのかはわからないけど、裕太から聞くには幼なじみらしい…

鏡也「……………なんでお前ら仲が良いんだ？」

裕太「前に話さなかったか？」

鏡也「忘れた」

小雪「ほんつと忘れっぽいね」

友紀「……………ノイローゼ」

鏡也「違っ！ただ、忘れっばいだけだ！」

裕太「それをノイローゼって言うんだよ…」
鏡也「……」

…一つ訂正。友紀は大人しいけど腹黒い…
というより、毒舌なのかな…

鏡也「ってか時間は大丈夫？」

小雪「うゝん、あつ！結構ぎりぎりかも」

裕太「やべっ！急がないと担任がうるせえぞ！」

鏡也「お、おう」

俺達の担任、名は『菊哉』（きくや）。

普段は温厚だけど、いざとなると凄い怖い

小雪「ほら、友紀も早く！」

友紀「……（コクン）」

だっだっだっ……

こうして始まる俺の学校生活

ただ、この時まではあんな事に巻き込まれるとは思ってもみなかった…

第二話

く授業中く

小雪「……」

裕太「……」

友紀「……」

鏡也「……？」

小雪（よく、寝れるね）
まったくだ

裕太

友紀（……起こす？）
このままにしておいてお

裕太

小雪（え、でも……）

裕太（まったく、鏡也の事になると必死だな）

小雪（そ、そんなじゃないから）

菊哉「こらっ！そこしゃべらない！」

小雪「は、はい」

裕太「す、すみません」

友紀「……（鏡也に指を指す）」

菊哉「寝かせとけ、後で課題を出させる」

友紀「……（コクン）」

く授業終了後く

鏡也「うーん、よく寝たっ！ってなんじゃこりゃ」

友紀「……課題」

裕太「課題をやって提出だとさ」

鏡也「うへ」

小雪「はあ、後で持ってきた。手伝ってあげるから……」

鏡也「サンキュー、小雪」

友紀「……（ジーツ）」

鏡也「ん？友紀も来るか？」

友紀「……（コクン）」

小雪（ねえ、裕太？友紀って何故か鏡也に懐いてるよね？）

裕太（そうなんだよな…、不思議なんだけど理由聞いても俺にすら教えてくれないんだよ）

小雪（友紀にも恋愛感情があるのかな？）

裕太（どうなんだろう？）

友紀「……（ガシツ）」

鏡也「え？」

裕太& amp・小雪「！！」

小雪「ちよつ、ちよつとなにやってるの！」

裕太「……」

ゆ、友紀が俺の腕を組んでいる…

男子としては嬉しいんだけど、いきなりすぎてびっくりする

鏡也「ど、どうしたの？」

友紀「……」

だ、だんまりですか…

↓放課後↓

鏡也「あの〜友紀さん？」

友紀「……？」

鏡也「いつまで俺の腕にしがみついているの？」

友紀「……帰るまで」

…放課後だよ、今

って言おうとしたら

友紀「……家に」

鏡也「へ？」

あんま考えたくないけど

鏡也「それって、家まで送れって事？」

友紀「……（コクン）」

小雪「たまには良いんじゃない？ねえ？裕太」

裕太「お、おう」

小雪（今日ちよっと付き合ってね）

はいはい...
裕太

小雪「じゃあ、私達是用事があるから」

鏡也「え？お、おう。また明日な」

第三話　小雪視点

大学を出て、二人は校門の裏に回った

…裕太を引きずりながら

裕太「いたた、引きずるなよ！」

小雪「……」

裕太「おい！聞いているの……」

小雪「しつ。静かにして」

裕太「なんなんだよ、まったく」

文句を言いつつも静かにするのね、裕太は
あつ、来た

な、なによ、二人で仲良くあるいて…

こうなつたら意地でも着いて行つてやる！

裕太「小雪！」

小雪「へ？な、何？」

裕太「何？じゃねえよ！いくら呼んでも返事が無いから心配したじやねえか！」

小雪「ご、ごめん。ちょっと考え事してて…」

裕太「……もしかして友紀のことか？」

小雪「え？」

裕太「なんかさっきからおかしいぞ？」

小雪「そ、そうかな？」

……どうせ、私の気持ちなんか

裕太「やきもち？」

小雪「…っ！」

ガンッ！

裕太「いって…なんにも殴ることはないだろ？」

小雪「あ。ご、ごめん」

っ、つい反射で殴ってしまった…

裕太「そういえば、俺と友紀があった話はしてなかったよな？」

小雪「え？う、うん」

裕太「いい機会だ、話してやるよ」

く裕太の過去く

裕太「たしか、あの日は小学生の時だったかな…」

あの時の俺は、俗に言う『がき大将』だった

まあ、周りから呼ばれてただけで俺に実感は無かったが。

運動神経抜群っていうだけで、まわりに男子が集まってきた

俺はうざくなって、最初は解散させたが、結局ついてきやがる…

俺は呆れて「勝手にしろ」と言った

小学五年の時には中学一年生並の外見になっていた

ある日、普通に一人で下校していたら、後ろから殴られた

ただ、頑丈だったためなんとか気絶はしなかったが、周りを見てみたら、前に俺の下に付いてた奴らだった

A「ちっ、やっぱり硬いか」

B「だから無理だつて言つたでしょうが！」

裕太「て、てめえら」

A「口の割にはフラフラじゃねえか！」

裕太「ぐっ…」

約十人に一方的に殴られて、俺の意識が無くなりかけたその時ガンッ

A「ぐわっ」

B「おい！どうした」

C「ぎゃあ」

B「お、お前は…」

ゆっくりと目を開けて見ると、本を読みながら、Aの頭を踏ん付けてる女の子が立っていた

因みにCは二？ぐらいふつとんでた

裕太「ゆ、友紀……」

友紀「……何やってるの？」

B「ひ、ひ」

D「に、逃げる」

E「友紀には構うな、とりあえず逃げろ」

俺を襲っていた約十人は一目散に逃げて行った

AとCを引きずりながら……

裕太「す、すげ……」

友紀「……大丈夫？」

裕太「お、おう。サンキュー……」

友紀「……だらない」

裕太「うるせ」

友紀「……保健室に連れてく、一人で立てる？」

裕太「よ、余裕……っ！」

ドサッ……

スッ……

裕太「あ、ありがとう」

友紀「……」

裕太「ってな訳だ」

小雪「案外裕太って喧嘩弱いね」

裕太「う、うるせ」

小雪「ってアンタのせいで鏡也達見失ったじゃないの！」
バシッ……

裕太「いってえ、俺のせいだよ！」

小雪「当たり前じゃない！」

……でも

小雪「裕太も苦労してたんだ…」

裕太「ん？なんか言ったか？」

小雪「う、ううん。なんでもない」

裕太「……？」

↳ 暫しの沈黙

裕太「そうだ！こんどは小雪と鏡也が会った話してよ」

小雪「へ？そ、そんな大した話じゃ無いし、つまらないから」

裕太「いいから、いいから」

小雪「……わかったわ」

小雪「たしか、私も小学生の頃に鏡也に会ったんだよね」

く小雪と鏡也の再会く

あの日、確か小学校上がるときに鏡也と別れてしまったの

理由が、鏡也側の父親の急な転勤

鏡也は転勤先の小学校に入ることになった

だから、もう会うことはないだろうと思ってた…

その五年後、小学校六年生の時、一人転校生が来るって噂があったのだけど、私は運悪く体調を崩して家で寝込んでいた…

寝込んでから、一週間後、久々に学校に行ったら授業の体育中、急に意識が無くなったの…

次に目が覚めたときは、見慣れない男の子と私の母親が楽しげに喋ってた…

小雪「……」

母「そうなのく、大変ねく」

？「いえいえ」

母「それにしても、ホント久々ねく」

？「しょうがないですよ、父さんが転勤に選ばれてしまったんですから」

母「今家はどこなの？」

？「あの家に住んです」

母「そうなの、両親は？」

？「……母しかいません」

母「え？」

？「父親と離婚したんです」

母「そうなの、ごめんなさいね、変なこと聞いちゃって」

？「いえいえ。あつ、小雪が起きたみたいですよ」

母「え？」

小雪「へ？」

突然話を振られて困惑する小雪

？「小雪、もう動いて大丈夫なのか？」

小雪「なんで私の名前を？」

？「あ、五年も経っちゃったから忘れちゃったか……」

母「な、なに？忘れちゃったの？」

小雪「え？え？」

？「おばさん、自分からいいます」

母「あ、じゃあお願いね。これから仕事行かなきゃ。じゃあ小雪をよろしくね」

？「はい」

ガラガラ…ピシャリ

？「さてと、忘れてるのはひどくない？小雪」

小雪「え、でも私、君みたいな人は知らないよ」

？「はあ……。やっぱ名前言わないとダメか……」

小雪「？」

？「俺の名は鏡也って言えばわかるよな？」

小雪「……」

え、ホントに鏡也なの？

じゃあ、もしかして……

小雪「この学校に来た転校生って……」

鏡也「そ。俺」

小雪「え？じゃあ保健室に連れてきたのも？」

鏡也「それも俺。つてか軽くなつた？何食べてたんだよ」

小雪「病み上がりだからしょうがないじゃない！」

鏡也「はあ……。お前は無理するんだからもう少し気をつけろよ？」

小雪「う、うん」

鏡也「あゝ！」

小雪「な、なによ急に」

鏡也「宿題やるの忘れてた！」

小雪「人の事心配するより自分の事をやれ！」

バシッ：

鏡也「いってえ！」

小雪「つて感じ？」

裕太「…あんまり変わって無いのな」

小雪「まあね…」

裕太「……」

小雪「今日はここまで。ありがとね、話し聞いてくれて。また明日

」

裕太「おう、また明日な」

く鏡也と友紀視点く

く帰り道く

鏡也「……」

友紀「……」

わ、話題が思いつかない

ってかあんまり喋った事無いし、どうしょ…

友紀「……鏡也」

鏡也「ん？」

友紀「…鏡也って、靈感ある？」

鏡也「急にどうした？」

友紀「…何故か同じ感じがする」

鏡也「それってもしかして、友紀にも？」

友紀「……（コクン）」

どうやら、友紀にも靈感があるようだ

意外に靈感ある人って見つからないんだけどね

唯一いたのが小雪だけで、まさか身边にまた一人いるなんて…

友紀「……私は霊能者の家系だから」

鏡也「え？」

まさか、俺のと同じ能力の家系か？

友紀「……確か、小田家から別れた能力って聞いた。その中でも私

は強い力の持ち主らしいけど…」

鏡也「小田家？どこかで聞いたような…」

うーん、なんだっけな

あっ！思い出した

鏡也「って小田家ってうちの家系だよ？」

友紀「……やっぱり」

鏡也「やっぱりとは？」

友紀「…今まで見てきた霊能者の類より力がある感じがしてた」

鏡也「!!」

友紀「……？」

鏡也「何かが前方にいる……」

友紀「……（コクン）」

鏡也「見えるのか？」

友紀「……少しだけ」

鏡也「たぶん、地縛霊だ。でも成仏はできない」

友紀「……なぜ？」

鏡也「それが小田家の掟だから」

友紀「……じゃあ、違う道にしよう」

鏡也「うん、とりあえずはね」

友紀「……あ、でもこの道しか道がない」

鏡也「まったく、厄介な地縛霊だ」

しょうがない……。札を使うしかないか……

スッ……

友紀「……なにそれ？」

鏡也「地縛霊用のお札。能力を使わないからこれなら大丈夫」

シュツ……

地縛霊「ぎゃあ〜」

地縛霊が消えると同時に目の前が白い光りに包まれた

友紀「……」

鏡也「相変わらず、眩しいな」

だんだんと目が慣れてきたら、そこは友紀の家の目の前だった

友紀「……ここ」 指を指す

鏡也「なんだって地縛霊が邪魔してたんだよ」

友紀「……さあ？」

鏡也「さあ？って……」

友紀「……ここまででいい」

鏡也「そうか？」

黙って友紀が俺から離れる

鏡也「また明日な」

友紀「……（コクン）」

「鏡也の帰り道」

鏡也「しつかしなんで地縛霊がいたんだ？」

最近減ってきてたのに、なぜ今更またでてきた

鏡也「小田家か…。一度調べてみる必要があるそうだ」

自分の家系を調べるのはあんまり乗り気じゃないんだけどな…

第一、なんで霊に能力を使っちゃダメなんだろう…

それも、物心付いた時から言われてたし

その辺は調べなきゃな…

第四話

「次の日」

ぴぴぴっ…

鏡也「ふぁぁあ」

もう、朝か…

結局、母親に聞いても教えてくれなかったし、自分で調べようにも小田家は遠いし…

鏡也「顔でも洗うか…」

ジャーツ…顔を洗浄中」

鏡也「ん〜。さてと、朝ごはんでも食べるか」

リビングに着いたら…

母親「あら、おはよう？」

友紀「……」

鏡也「うん、おはようってなんで友紀がいるの？」

友紀「……たまたま」

鏡也「いや、たまたまじゃないだろ、それ」

母親「びっくりしたわよ、ドアを開けたら目の前に座って待ってるんですもの。聞いてみたらあなたを待ってるって言ってたから、寒いし入れてあげてたの」

……だからってね〜

母親「ほ〜ら、早く準備しなさい！時間がないわよ！」

鏡也「ぶっ！げほげほ…。は、早く言つてよ！」

友紀「……（クス）」

鏡也「……」

い、今笑った？

鏡也「ってそんな場合じゃない、早く着替えなきゃ」

「鏡也着替え中」

鏡也「よし、行ってきました」

友紀「……（コクン）」

鏡也「いや、友紀も来るの！」

友紀「……」スッ……

鏡也「よし行くか」

友紀「……うん」

母親「行つてらっしゃい」

「鏡也& a m p・友紀登校道」

鏡也「ん、時間的には走らなくても大丈夫そう」

友紀「……そう」

鏡也「そつえばなんで今日俺の家に？」

友紀「……これ」

鏡也「ん？」

渡されたのは古い書物

題名は『霊界』

中を開こうとしたら、友紀が止めた

友紀「……まだダメ。……全員揃ったら開いて」

鏡也「わ、わかった」

？「おい鏡也、友紀」

ん？この声は……

鏡也「裕太？」

裕太「よう。やっぱりお前らだったか。ってか珍しい組み合わせだな」

鏡也「朝起きたら友紀が家の中にいた」

裕太「は？……ホントか友紀？」

友紀「……（コクン）」

鏡也「なんでだと思う？」

裕太「知らない。ただ、これだけは言える。友紀はお前の何かに気

に入ったんだと思われる。まあ、簡単に言つと懐かれたつてところかな？」

鏡也「なぜ？」

裕太「知るか！友紀に聞け」

鏡也「聞いても答えてくれない」

裕太「そういえば、小雪は？」

鏡也「あれ？見てないな……」

友紀「……」

裕太「ん〜、まあ先にいるだろ」

友紀「……霊現象に巻き込まれた形跡がある」

鏡也（霊現象？）

友紀（霊がたまに生きてる人間を霊界まで連れ込む時がある……）

鏡也（そついえば、小雪も少しだけ靈感があるみたい）

友紀（……放課後空いてる？）

鏡也（空いてるけど）

友紀（……ちよつと家に来て）

鏡也

友紀（……助けに行く）

鏡也

裕太「なにやってんだよ〜！はやくしろ〜！」

鏡也「お、おう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6720o/>

アラベスクの夜に

2010年11月8日17時29分発行